

伊賀で起きている「本の文化」の地殻変動。

三重県最古の図書館跡地（史跡旧崇廣堂）を舞台に、過去を消費する観光から、現在進行形の文化を訪ねる旅へ。「Waza Waza — Iga Art Book Fair 2026」開催

JR新堂駅前の「BOOKMARK STORAGE」から、坂倉準三建築を再生した「旧上野市庁舎 SAKAKURA BASE（伊賀市中央図書館）」へ。今、伊賀市では図書空間をめぐる驚くべき建築と文化の刷新が続いています。この地脈の起点には、1821年に藩校として建てられ、のちに県最古の公立図書館として地域の知を支えた国指定史跡「旧崇廣堂」が存在していました。2026年9月26日（土）・27日（日）、この歴史の系譜を受け継ぎ、つくった人の手から直接手渡されてきた「本」というメディアの可能性を問い直す国際アートブックフェアを開催します。入場無料。これは都市の文化を地方にコピーするイベントではありません。地方だからこそ可能な「深い思考と対話」を、今この街で立ち上げようとする試みです。

1. 伊賀で起きている「本の文化」の地殻変動

近年、伊賀市では図書空間の建築的・文化的アップデートが加速し、市民のライフスタイルそのものを変える現象が起きています。

2023年開館「BOOKMARK STORAGE」

DMG森精機が関わるJR新堂駅直結の複合施設。施設内には現代アートが配置され、アートブックも豊富に取り揃えられています。夜21時まで開館し、感性を刺激する市民の新たなサードプレイスとして定着しています。

2026年4月開館「SAKAKURA BASE（伊賀市中央図書館）」

ル・コルビュジエに学んだ巨匠・坂倉準三のモダニズム建築（旧上野市庁舎）を美しく再生。こちらも夜21時まで利用可能となり、令和6年（旧図書館時代）と比較して移転後の4月は6.5倍、5月は8.2倍という驚異的な入館者数を記録するなど、街に大きなうねりを生み出しています。

休日にかしこまって触れるものから、夜の日常（サードプレイス）へと、アートや本との距離感が劇的に変わりつつある伊賀。本イベントは、この現代の図書空間の熱狂から、街の知の原点である「三重県最古の公立図書館（史跡旧崇廣堂）」へと至る歴史の「線」を、現在進行形で繋ぐプロジェクトです。

2. 「文化は都市に集中すべきか？」——都市中心型を問い直し、地方と世界を直接結び直す

すべてが東京などの大都市に一極集中する現代において、「国際的な文化は都市で生まれ、地方はそれを消費する」という構造が当たり前のものとなっています。さらに平成の大合併以降、地方都市が独自に築いてきた姉妹都市のような「草の根の国際交流」も、行政の枠組みの中で徐々に見えにくくなってきました。

本フェアは、この「都市中心型の文化構造」に対し、あえて明確な問いを投げかけます。

東京というフィルター（中継地）を通すのではなく、伊賀という地方からダイレクトに世界と対話する場を設計。公募と選考を経て、**日本・アメリカ・中国・シンガポール・イラン・チュニジアの6の国と地域から38組**の作り手が集まります。都市のノイズから離れた場所だからこそ生まれる深い対話を通じて、売り買いを超えた「新しい国際交流」と「文化の震源地」を、この街から立ち上げます。

Waza Waza Archive——出展ブースのほかに、海を渡って届いた本の展示があります。ラトビアの出版社 **kuš!** のコミックス、ノルウェーの写真家 **K Linnea Backe**、フランス・ベサンソンのアーティストコレクティブ **Zone À Publier**、パリの独立系雑誌 **Schema Magazine** などの本が並びます。

3. 「本」とは何か——手から手へ渡ることの力

ZINE、アーティストブック、セルフパブリッシング、そして「一冊しかない本」。作品集や詩集のような一般書籍から、本という形態や概念そのものを作品として考えた実験的なものまで、そのあり方はさまざまです。こうした本は、出版流通を通じて届けられるだけでなく、ブックフェアの場で、つくった人の手から直接、手渡されてきました。大都市の巨大な見本市でこれらを一過性のトレンドとして消費するのではなく、伊賀という土地でじっくりと展示・販売し、対話すること。それは単なる本の売買を超え、現代において「本とは何か」「表現のインフラとはどうあるべきか」を根源的に問い直す試みです。

4. 観光のパラダイムシフト：現在進行形の文化を訪ねる旅

「忍者・芭蕉・城」を消費する過去の観光から、街で今まさに立ち上がっている文化の「線」を歩く旅へ。建築を巡り、歴史を歩き、現在の表現に出会う。伊賀のポテンシャルを「体験」へと変換する、新しいツーリズムです。

会場内の有恒寮——かつて遠方の学生が暮らした寄宿寮——では、フランス出身のアーティスト・研究者（博士）・キュレーターであるトマ・ヴォーティエ氏による茶会「読み茶 / Reading Tea」を展開します（9月26日 11:00–19:00 / 27日 11:00–17:00、1席30～60分・1～5名、予約はウェブサイトから、当日参加も可）。地元・柘植町の「fika coffee stand」が淹れるコーヒーと共に、フェアで出会った本とお茶を分かち合う親密な時間が流れます。

また会期中の両日13:00–15:00には、伊賀市中央図書館（伊賀市教育委員会）の移動図書館車「にんにんブッカー」が本を載せて会場を訪れます。1905年にこの崇廣堂で生まれ、1984年に建物を出た図書館が、ふたたびこの場所に帰ってきます。

【開催概要】

- ・ 名称： Waza Waza — Iga Art Book Fair 2026
- ・ 会期： 2026年9月26日（土）11:00–19:00 / 9月27日（日）11:00–19:00
- ・ 会場： 史跡旧崇廣堂（三重県伊賀市上野丸之内78-1）
- ・ 入場： 無料
- ・ 出展： 38組（日本・アメリカ・中国・シンガポール・イラン・チュニジア＝6の国と地域）
- ・ 詳細： <https://wazawaza-artbookfair.com>
- ・ 主催： わざわざ実行委員会
- ・ 共催： 公益財団法人 伊賀市文化都市協会
- ・ 後援： 伊賀市 / 伊賀市教育委員会 / 公益社団法人日本図書館協会 / 公益財団法人三重県国際交流財団
- ・ 協力： 株式会社REMARE / ジェネラルストア 百代 / fika coffee stand / トマ・ヴォーティエ
- ・ Waza Waza Archive 参加： kuš!（ラトビア） / K Linnea Backe（ノルウェー） / Zone À Publier（フランス） / Schema Magazine（フランス）ほか

【出展者一覧（38組）】

&gato.（日本）／0x8x0_no（日本）／51 Personae（中国）／Angelica Ong 王歆惠（シンガポール）／Anna Darab（イラン）／AprilBooks（日本）／DARF（チュニジア）／I.CEBERG（日本）／Jaron Menzimer（アメリカ）／NESSIE（日本）／Naomi Murakami（日本）／PPP site（日本）／Polly Fossey（アメリカ）／STAIRS PRESS（日本）／Sohei Terui（日本）／Written by Daniel（アメリカ）／between in between（日本）／kitai（日本）／nekoba（中国）／twelvebooks（日本）／うちだ みちこ（日本）／たまゆら湯（日本）／のんびる（日本）／アリカ（日本）／オッコ（日本）／ティックの日本（日本）／ネコゼ商店（日本）／ビジテリアン大祭（日本）／ヤギユウ ショウ（日本）／増本 綾（日本）／奥出理人 / OKUDE MASATO（日本）／庭の拝見（日本）／森永侑樹(せんせいの句会)（日本）／楠尚子 / Naoko Kusunoki（日本）／烽火書房（日本）／猫屋芳樹堂（日本）／蒼草書院（日本）／道音舎 / Michioto Publishing（日本）

【本件に関するお問い合わせ先】

わざわざ実行委員会 広報担当：リリー・オカモト

Email： press@wazawaza-artbookfair.com

Pressページ： <https://wazawaza-artbookfair.com/press>
